古典の恋　その三

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
古典の恋　その三

【Ｎコード】
Ｎ４５５２Ｍ

【作者名】
橙

【あらすじ】
古典の苦手な朝子は、この夏休みに、夏期講習へ行こうと思いました。
さらに古典作品とは関係なくなったような……。
夏と悩みと、恋のお話。

1

夏、本番。夏といったら、何を思い浮かべますか？
ぎらぎら照りつける日差し。止むことのない豪雨のようなセミの鳴き声。海やプール、かき氷とアイスクリーム。盆踊りに、花火。
夏はいろいろなものがぎっしりつまっているから、きっと人それぞれで連想するものが違うだろう。いち高校生のあたしは、夏に対しては、暑くて熱くてワクワクするようなイメージしかない。まだ受験生ではないしね。
「バカね、夏といったら――甲子園でしょう。」
それも確かにあるかも。でも、頼子。あんた去年はそんなこと、一言も言ってなかったくせに。

「野球部の？」
きょとんとして、あたしは聞き返した。意外な人から、意外な言葉を聞いた気がしてならない。頼子は当然、というように頷いた。
「そう、地区予選の初戦。夏休み第一週目の土曜。朝子、どうせ暇でしょ？」
どうせとは何だ、失礼な。
期末テストも終わり、夏休みが直前に迫った、だらだらした日々。皆の緊張感は既になく、楽しい休みの計画や夢想に忙しい。実質これが、高校最後の遊べる夏休みなのかもしれない、という漠然とした予感もあって、なおさら気合いが入っている感じだ。夜行バスで旅行に行こうなんて話も、ちらほら聞こえる。
あたしは正直うさんくさく思いながら、頼子を見返した。透明な下敷きで、やる気なくぱたぱた顔をあおぐ。昼間の空気は、どうしたって熱気がこもっていて、どれだけ風を送ろうが全く涼しくない。
「……野球部の応援、って。いきなりどうしたの？あんた、日焼け

すんのすごく嫌がっているくせに。」
ガンガン日の当たるスタンドに長時間いなければならないことを、それを一番忌避しているはずの頼子が提案してくるとは。一体、どういう風の吹きまわしだろう。
頼子は少し肩をすくめた。
「そりゃあ、それなりの対策はするよ。朝子は特別美白志向なわけじゃないし、問題ないでしょう。」
だから一緒に、野球部の応援に行こうよ。頼子はそう言った。
「そうねぇ……。」
本当ならすぐに「いいね！」と返事するところだけれど、あたしは煮え切らない態度しかとれなかった。ちょっと、思うところがあるのだ。
「……それにしても本当にどうして突然、野球部の応援なんか。」
なんか、と言うのは失礼かもしれない。けれど頼子と野球部、この2つがあたしにはうまく結び付かなかった。
頼子は女子バレー同好会に入っている。去年の秋に、頼子たち有志が集まって立ち上げたばかりで、まだ「部」には格上げされてない同好会だ。
野球とバレー、2つとも球技と考えれば共通点かもしれないけど、活動場所も違うし、接点はあまり思いつかない。だから、あたしには頼子の提案が唐突に思えるのだ。
頼子はあっさり言った。
「どうして、って。わたしが野球部の梶と付き合っているの、知ってるでしょう。」
「ええ？」
初耳だ。驚くあたしに、かえって頼子の方が驚いたらしい。あたしたちはつかの間、まじまじと見つめあった。
「――知らなかった？」
「うん。」
「結構、広まってると思ってたのに。」

頼子は不思議そうに首をかしげた。
「朝子、こういうことに耳が遅いんだねぇ。」
うるさいなー。あたしは唇をとがらせた。あたしがそういう情報を皆より早くつかんでいることなんて、まずない。「そういう雰囲気」を察知する能力だって皆無だ。結構気にしていることだから、あまりつっつかないでほしい。
「――で、その梶くんの応援に行きたいの？」
話を戻すと、頼子は頷いた。
「そ。梶はピッチャーなんだけど、ベンチ入りしたんだって。もしかしたら中継ぎで出られるかもって言ってたから、見に行きたいなーと思って。」
彼氏が試合に出られそうだというなら、応援に行ってもおかしくない。でもあたしは、頼子の「梶くん」の顔も知らないのだけれど。
「あたしにも、その『梶くん』を応援しろって？」
「あんたには新田がいるでしょうが。」
なにを当然のことをとばかりに、さらりと頼子は言った。
あたしはぽかんとして――絶句した。
一瞬、「新田」って誰、とか思ってしまったけれど。あたしの知り合いには「彼」しかいない。
「ゆ――新田くんのこと、知ってるの？」
心底驚いて、あたしは頼子に聞き返した。
新田くんとあたしは、幼馴染だ。しばらく疎遠だったけれど、最近再び仲良くなれた。
でも本当に、ついこの間まで断絶状態だったのだ。あたしと彼が幼友達だということを知っている人は、少し前まで全くいなかったはずだけれど。
頼子は呆れたような顔をした。
「そりゃ、知ってるよ。新田も野球部でしょう。
――あと、最近朝子と仲がいいって話も、知ってる。」
頼子はにやりと笑って、本当だよね？と続けた。あたしは頷く。

「人のウワサって、すごいなぁ……。」
なんだか感心してしまった。こんなマイナー情報でも、するする広まっていくプロセスがあるのだ。たぶん、あたしと新田くんが話をしているところを誰かが見たんだろう。それで、あたしと新田くんが古い友達であると知れたんだ。
頼子は少し考え込むようにして、しみじみと言った。
「わたしの耳にしたウワサとは、随分雰囲気が違うようだけど。――それより、新田もレギュラーらしいよ。」
「そうなんだ。」
新田くんは昔から、運動神経がいい。レギュラーってたぶん、3年生を押さえて勝ち取ったんだろう。さすがだ。
見に行きたいなぁ。あたしの気持ちは大きく揺れた。
「ね、行こうって。」
「……うーん。」
曖昧に言葉を濁して、あたしはこりこりと額をかいた。ちらりと頼子を見ると、当たり前のように行くことを期待している顔だ。あたしは心苦しくなって、おずおず迷いの原因を打ち明ける。
「――実は、さ。この夏、夏期講習に行こうかな、って思ってて。」
「へぇ、塾？」
頼子は目を丸くした。あたしは頷く。
来年の大学受験も見すえ、そろそろ何かやっておくべきかなーという焦りが、自分の中にあるのだ。まぁ、まずはおためし、という軽い気持ちなんだけれど。――ただ。
頼子は意外そうな顔をしながらも、ふうんと頷いた。
「いいんじゃない、夏期講習に行くのも。そうしたって、1日くらいは野球を見に行けるでしょう。」
「それなんだけど。」
あたしは迷いつつも、全部言った。
「……塾行ったらさ、古典の勉強時間、なくなっちゃうかなぁって。」

「――はぁ？」
頼子は眉をつり上げ、大きな声を出した。怒っているような剣幕に、思わずあたしは首を縮める。
「古典って、あんた。まだやるつもりなの？」
呆れたように、頼子は腰に手を当てた。あたしは、ぐっと言葉に詰まる。
「朝子、あんた理系志望だったよね？」
「そうだけどさ……。」
来年の文理選択で、あたしは理系クラスに進むつもりだ。その方針を変えるつもりはない。
でも、もっと古典を勉強したいというのも、正直な気持ちなのだ。せっかく、おもしろいと思うようになってきたのだから。
ま、それはいいけど、と頼子は息をはいた。
「とりあえず、８組行くよ。」
「え？」
なんで８組？
あたしの疑問の声を、頼子はすっぱりと無視した。がっしり腕を掴まれて、そのままずるずると、頼子に引きずられていった。

2

「圭介！」
８組の教室に入るやいなや、頼子は声を張り上げた。
必然的に、皆の目がこちらに集まる。けれど、頼子は全然ひるまなかった。こういうところは、さすが頼子だ。
窓際の席で、ひょいと長い手が挙がった。男子が５人ほど、集まって座っている。その中の１人が、笑ってひらひら手を振った。
「おお、頼ちゃん。どうしたの？」
どうやら彼が、梶くんのようだ。頼子もにっこり笑顔を返して、近づいていく。もちろん、腕を掴まれたままのあたしも一緒にだ。
いい加減、離してほしい。
「野球部の応援、１人確保したよ。」
「マジで？ありがとー。」
くしゃっと顔全体で、梶くんは笑った。坊主頭のよく似合う丸い瞳がきゅっと細まって、右の頬にえくぼができる。
結構、かっこいい人じゃんか。そう頼子に耳打ちしてやろうとして、あたしはちらりと横に目をやった。

――その視界にいきなり新田くんが飛び込んできて、あたしは驚いて息をのんだ。
頼子を挟んで、一番近くに座っている。新田くんもこっちを見ていて、目が合った。
そうか、８組って新田くんのクラスだ。
「頼ちゃんの友達？名前なんていうの？」
梶くんが親しげに聞いてくる。それに答える前に、あたしは新田くんに向かって、ちょっと笑って手を振った。挨拶だ。
「ええと、頼子の友達の藤原朝子です。よろしくね。」
新田くんも、軽く手を挙げて挨拶を返してくれる。そのやりとり

を見て、梶くんがぐいと身を乗り出した。
「藤原さんね。え、ていうか、何？新田と知り合いなの？」
梶くんのつぶらな瞳が、なぜかきらきらと輝いている。
「おい、例の子かよ。」
周りの男子も、いきなり盛り上がって、新田くんを小突き始めた。新田くんがうるさそうに、それを振り払う。
「あ、うん。新田くんとは、同じ中学で。」
あたしは慌てて言った。まさか、食いつかれるとは思っていなかった。
「こいつと中学一緒だったの？その時の話、詳しく聞かせてよ。」
「こんなかわいい子と知り合いとか、聞いてないぞ。」
男の子たちは、俄然興味をもってしまったようだ。大声で笑って盛り上がる彼らとは反対に、あたしは焦りと不安で、急に鼓動が速くなった。

この雰囲気に、覚えがあるのだ。
中学時代、新田くんと疎遠になったきっかけも、こんな感じだった。あたしが仲良くしようと話しかけたことで、周りにおもしろがられて、いろいろ言われて。それを嫌って、新田くんはあたしを避けたのだ。それはもう、徹底的に。
どうしたら、話をそらせるだろう。冷や汗が背中をつたう。うろたえてしまって、うまく別の話題を探せない。

けれど、新田くんはとても冷静だった。
「ああ。藤原は、幼馴染なんだよ。」
あっさりそう言って、「な？」とあたしに同意を求める。思わずぽかんとまぬけに口を開けて、あたしは頷いた。
「おいなんだ、そのうらやましい話は！」
「幼馴染だと？！」
周りの子から、新田くんが頭をはたかれる。痛そうだ。

けれどあたしは、ほっとした。気まずく思った空気は、新田くんのおかげで、きれいに流れていた。
梶くんが、にっと口の端をつりあげた。
「まぁ何にせよ、応援してくれるのはありがたいな。藤原さんが来てくれるの、すげー嬉しいよ。」
「うん、がんばってね。」
つられて、あたしも笑った。本当は、応援に行くだなんて一言も言ってないんだけれど。さすがにそんなこと、この場では言えない。
「当日の応援だけじゃなくて、わたしら2人、千羽鶴もちゃんと協力するからね。
――それじゃ、圭介。また部活の後で。」
頼子は勝手に、さくさく話を進めていく。また初耳なんだけど、千羽鶴って何？
「おう、じゃーね。」
梶くんが明るく手を振った。
強引な参加表明が済んで、もう頼子も用事はないのだろう。再び腕を引っ張られ、あたしは8組を後にする。
「バイバイ、藤原さん。」
「今度、新田の中学の話、聞かせてねー。」
背中からかけられた声に、振り返って笑顔で手を振った。

なんだか、感慨深くすらあった。
中学時代とは、全然違うのだ。女友達のことをひやかす側に悪意はないし、ひやかされた側も、あっさり笑って受け流すことができる。思春期より一歩、大人になっている。新田くんの対応を見て、そう感じた。男の子の成長は、すごいな。
あたしと新田くんが疎遠になったことは、もう本当に過去の話なのだ。そう再確認できたように思えて、あたしは嬉しくなった。
1人でにやつくあたしに、隣の頼子から弾んだ声がかかった。
「さて、これで朝子も、応援に行かざるを得なくなったよねぇ。」

げ、と思わずうめき声がもれた。
そうだ、問題は何一つ解決していない。塾と古典の勉強と、一体どうしよう。野球部の応援も、本当に行けるのかわからない。あたしは苦い思いで、唇をぎゅっと結んだ。
夏休みの予定を、ちゃんと決めないと。

3

生徒会の集まりがないと、あたしはただの帰宅部だ。

テストが終わったから、小野くんとの古典勉強も一つの区切りがついた。あたしはもっと続けたいと思っているけれど、実際のところ、今後のことは中に浮いた状態だ。小野くんの都合はわからない。夏休みに入ってしまえば、接点もなくなってしまう。

何もない放課後は、さみしい。日が高いからいつもの夕方より明るいのに、気分はイマイチ上がらない。たぶん、ぽつんと1人だからだろう。頼子も含め、よく遊ぶ友達は皆、部活に精を出している。運動部も文化部も、夏は部活動の本番だ。こんな明るいうちから帰る子なんて、誰もいない。

あたし自身、夏休みに入れば、生徒会の集まりがある。秋の文化祭に向けて、既に実行委員会は動き出していた。各クラスも出し物の準備を始めるだろう。そうなると、生徒会の仕事は山のようにあるのだ。忙しくなるだろう。

でも、今日の帰り道は1人だ。

電車の中は、まださほど混んではいなかった。会社帰りの、スーツを着た人は見当たらない。年配の方や、小さな子連れの人がちらほら座っていて、座席も十分空きがあった。

ぼうっと窓の外に目をやっていたあたしは、ほとんど頭を空にしていた。カタンカタンと、一定のリズムを刻む電車の揺れには、そうさせる力があると思う。けれど唐突に、――ひらめいた。

がばりと立ち上がる。

周りの人からぎょっとした目で見られたけれど、すぐに駅に着いてくれたおかげで、不審がられずにすんだ。あたしはそこで途中下車した。こういう時、定期ってすばらしいと思う。ホームの階段を

駆け降りる足が、軽かった。

そこは、駅前に大手の塾や予備校が立ち並ぶ街だった。通学途中にあるし、あたしも夏期講習に通うとしたら、たぶんこの駅前にあるどこかの塾になるだろう。

だったらいろいろ悩むより前に、まず下見してみようと思ったのだ。

あたしは勇んで、めぼしい予備校のビルに突撃していった。

とりあえず、エントランスに並べてあるパンフレットの類を、片っぱしから集めていく。どの塾のものにも、大きな文字で大学合格人数の実績が書かれている。実力別コース、個別指導、ビデオによる講義、人気講師による熱血授業！……ろくに目も通さず、集められるだけ全部集めた。

大量のパンフレットとおかしな達成感を抱えて、あたしはそのまま意気揚々と帰宅した。けれど、情報はただ集めればいいものじゃないということを、あたしはすぐに学ぶことになった。

「で、結局どれがいいの？」

テーブルの上には、色とりどりのパンフレットが無造作に並べられている。それを前にして、お母さんが核心をついた。

あたしはぐっと詰まり、苦しく目をそらした。

「……どれがいいんでしょう。」

「呆れた。案内もらうにも、もっと考えてもらって来なさいよ。」

正論だ。お母さんの大きなため息に、あたしは項垂れた。返す言葉もない。

「朝子は本当、しっかりしているように見えて、肝心なところでダメねぇ。」

「うるさいな。」

自分でもそう思ったので、文句にも勢いがなくなってしまう。
「あんたは長女なんだし、後の翔のためにも、ちゃんと調べてくれなきゃ。」
「翔なんか今、関係ないでしょ？」
「なんにせよ、これじゃ決まらないじゃない。」
ぴしゃりと指摘され、あたしは黙るしかなかった。
パンフレットがあまりにたくさんあって、どれがどう違うのか、どのコースをとるべきなのか、全くわからなくなってしまったのだ。いろいろ比較して参考にしようと、目についた予備校のものは全部とってきたけど、それが仇となってしまった。
一つの教科にも、レベルや単元ごとに複数の講座があるらしく、何を選べばいいのかさっぱりわからない。予備校がこんなに複雑なものだとは、思っていなかった。適当なところ通えばいいやーなんて、認識が甘かったのかもしれない。
お母さんは渋い顔をして、散らばったパンフレットを片付け始めた。それを奪うようにして、あたしもプリント束をかき集める。
「とにかく、ちゃんと決めるから。これから調べるから。」
あたしの断固たる宣言にも、お母さんは疑いの目を向けてきた。
「できるかしらねぇ。」
カチンときた。あたしが勢い込んで反論しようとした時、ふいに、軽やかな玄関のチャイム音が響いた。
「え？」
びっくりして、あたしは思わず壁にかかった時計を振り仰いだ。こんな時間に、誰だろう？時刻は夕飯も済んだ、８時過ぎだ。来客のあるような時間じゃない。
「誰かしら。朝子、ちょっと出てきて。」
お母さんが顎先で促す。その仕草にさらにイライラしながらも、あたしは立ち上がった。

4

扉を開けた先にいたのは、――新田くんだった。
「ど、――どうしたの？」
あまりに思いがけない人が来客だったので、あたしは驚きで何度も瞬いた。
新田くんは表情を変えることなく、手にもっていた紙袋をすっと掲げた。
「これ、母さんが。……頼まれたものらしいけど。」
「頼まれたもの？」
ぽかんとしたまま、その袋を受け取った。中を覗くと、クリアファイルが入っている。ちらりと見えるこの色とりどりのプリントは、一体何だろう？
「まぁまぁまぁ、勇くんじゃない！久しぶり。」
お母さんが、リビングから顔をのぞかせた。気味の悪いくらい、満面の笑顔だ。新田くんは「どうも」と、軽く頭を下げた。
「元気にしてた？ウチ来てくれるの、いつぶりかしら。上がっていく？」
お母さんの声が、いつもより高く弾んでいる。新田くんが来て、テンションが上がっているのだ。
昔から、お母さんはゆーくんのことが好きだった。朝子と違って芯からしっかりしてるわ、なんて言って。
「いや、すぐ帰るんで。」
新田くんが律儀に答える。あたしは紙袋からファイルを取り出して、ぎょっとした。
「――何これ、塾の案内！」
「ああ、わたしが芳子ちゃんに頼んでおいたのよ。」
お母さんがあっさりと言った。
芳子さんとは、新田くんのお母さんのことだ。うちのお母さんと

は、お互い名前で呼び合うくらい仲が良い。よく一緒に買い物に行ったり、家を行き来したりしている。
それにしても。
「どうして、おばさんにそんなこと頼むの！？」
腹が立って、かぁっと顔が熱くなった。知らないところで、勝手にこんな話を進めないでほしい。私のことなのに！
「だって、あんた1人じゃ調べられないじゃない。」
お母さんは全く悪びれず、肩をすくめた。
「芳子ちゃんのところは、勇くんの上の健くんと浩くんで、受験を経験してるでしょ？こういうのは、経験者に聞く方が早いの。」
「でも――。」
ついさっき、あたしが自分で決めると宣言したばかりなのに。
悔しくて、唇をかむ。芳子おばさんのプリントは、隅の余白にその塾の評判までメモしてあった。枚数は少ないけれど、それは厳選されているからだろう。見やすくて、わかりやすい。何も考えず集めたあたしの資料より、はるかに参考になることは明らかだった。
「もちろん最終的には、朝子が決めなさいよ。」
お母さんは腕組みをして言った。
「ただ、よく知っている人の意見は参考になるから、わたしが頼んだの。ここからは、あんたが判断しなさい。」
きっぱりそう言うと、お母さんは新田くんに向き直って、ガラリと口調を変えた。
「ありがとうね、勇くん。わざわざ持ってきてくれて。そうだ、ちょっと翔も呼んでこようかしら。」
お母さんはくるりと踵を返し、軽い足取りで奥に戻っていった。うきうきと腕を振っている。「いや、おかまいなく」と呼び止める新田くんの声も、聞いちゃいないようだ。
新田くんはお母さんの勢いにあてられて、少々呆然としているようだった。あたしは恥ずかしくなって、紙袋をぎゅっと抱えた。つい意識の外にあったけれど、新田くんに全部聞かれていたんだ。

「なんか……お恥ずかしいところを……。」
「いや……。」
新田くんは数度瞬いて、ふっと笑った。
「おばさん、全然変わってねぇな。」
「残念ながらね。」
あたしは顔をしかめてみせた。新田くんがおかしそうに、ちょっと肩を震わせた。あたしもゆるく息をはいて、肩の力を抜いた。
「本当ありがとう。実は塾のことなんか全然わからなくて、ちょっと途方にくれてたんだ。」
素直にするりと、お礼を言うことができた。新田くんは首を振る。
「ただ届けに来ただけだから。――母さんが、お前のこと褒めてた。ちゃんと考えてるって。」
その言葉で、あ、と気付いた。
「新田くんは、夏期講習に行かないの？」
「ああ。」
やっぱり試合もあるし、部活が忙しいんだろうか。
一緒に行けたら、夏期講習だって楽しいだろうな、と思ったのだけれど。
「そっか……。」
残念に思って、あたしはうつむいた。でも、仕方ない。新田くんには、野球を一番にがんばってほしい。せっかく、レギュラーになれたのだから。

新田くんが、ためらいがちに口を開いた。
「あのさ……今日の休み時間の話だけど。」
「え？」
あたしは顔を上げた。新田くんは首の後ろをかきながら、少し言いよどむ。
「応援の話。……もし講習とかで忙しいなら、無理して来なくてもいい。」

「え――。」
驚いて目を瞠る。絶句するあたしに、新田くんはちょっと慌てたように手を振った。
「いや、来てほしくないわけじゃない。無理するな、って言いたいんだ。お前、生徒会の仕事だってあるんだろ。」
新田くんはふ、と息をはいて、じっとこちらを見つめた。
「夏休みだろ、やりたいことやれよ。……今日、応援の話にあんま乗り気じゃなさそうだったから。」
ガン、と頭を打たれたような衝撃だった。――見抜かれていた。
「ごめん、あたし――。」
「いいって。だから、暇なら応援して。それじゃ。」
新田くんはそれで話を打ち切って、「お邪魔しました」と帰って行った。意外なほど静かな動作で、扉は閉められた。

「あら、勇くん帰っちゃったの？」
奥から飛んできたお母さんの声を、やけに遠く感じた。呆然としたまま「うん……」と返事をして、あたしはその場にしゃがみこんだ。紙袋を抱く腕に、力がこもる。
衝撃が抜けない。額を押さえて、深く深く息をはいた。
あたしは最低だ。野球部の応援に乗り気じゃなかったこと、しっかりと新田くんに伝わっていたのだ。自分の不誠実さを、まざまざと示されたように感じた。
あたしの中での優先順位が、曖昧だったせいだ。やりたいことがたくさんあるなら、しっかり整理しなきゃいけないのに。野球部の応援も、夏期講習も、古典の勉強も。生徒会の予定だって、ちゃんと把握し直さないと。
「なあに、そんなところに座りこんで。邪魔よ。」
通り過ぎていく怪訝そうなお母さんの声に、あたしはもう何も返さなかった。ぐるぐると胸に渦巻く自己嫌悪とともに、あたしは静かに決意を新たにした。

もっと考えて、ちゃんと決めよう。高２の夏休みは、１回きりなのだから。

5

暑い。それしか考えられない。
白く焼けつくような太陽の下、あたしはよろよろと力なく歩いていた。
今まで、お腹が痛くなるくらい冷房の効いたところにいた。それとは落差がありすぎる、この外の気温だ。アスファルトが強い日光を照り返して、どこにも逃げ場がない。汗が顎からしたたり落ちて、ワンピースが肌に張り付く。今、シャワーを浴びて涼しいところで麦茶を飲めるなら、何だって投げ出していい気分だ。
絶好調な夏の熱気に、完璧に負けている。日差しとは裏腹の暗く沈んだ気持ちで、あたしは駅とは反対方向の道を、あてもなく歩き続けた。

待望の夏休み、しかもその初日に、なぜあたしがこんなにも沈んでいるのかというと。全て夏期講習のせいだ。
新田くんの家まで巻き込んでしまったあたしの予備校探しは、どうにか無事、決着をみた。駅から歩いて3分、正面に書店のある、割と有名な予備校に決めたのだ。新田くんが持ってきてくれた資料を見ても、実績も評判もそこそこ良いようだった。何よりの決め手は、ノブ会長が通っていることだったけれど。
我らが生徒会長・吉田信広くんは、普段は飄々とふざけているけれど、かなりの秀才だ。会長の仕事をバリバリこなしながら、成績も非常に良いレベルを常にキープしている。彼ならいろいろ詳しいかもしれないと、話を聞いてみたのだった。
早くしないと、講習生の募集を締め切ってしまう塾も出てくる。そう焦っていた夏休み直前のある日、ノブ会長はあっさりあたしの

悩みを打ち砕いた。
「夏期講習で迷ってんの？じゃあ、僕の通ってるところにしなよ。紹介するよ？」
読んでいる本から目も上げず、ノブ会長は言った。
生徒会室は校舎の北側、あまり日の当らないところにある。風通しも良くて、夏は他の教室より大分すごしやすいのだ。それを知っている生徒会メンバーは、用もないのにこうして集まって、ダラダラしている。
「でも、会長が通ってるところなんて……難しそう。」
あたしとノブ会長じゃ、レベルが全然違う。怖気づくあたしに、会長は苦笑した。
「そりゃ、僕は特進クラスだけど。ちゃんとレベル別になってるから、大丈夫だって。」
ノブ会長は本から顔を上げて、眼鏡をすっと押し上げた。
「親切な先生が多いから、気軽に質問できるのが良い点かな。僕みたいな塾生からの紹介で入れば、受講料の割引があるし。」
割引、の言葉に思わず、ぴくりと肩がはねた。会長の黒ぶち眼鏡がキラリと光る。
「そして紹介した僕自身にも、割引の恩恵があるわけだ。
――どう？」
「乗った！」
あたしは勢いよく手を挙げ、その場で即決した。振り返ってみれば、なんだか「割引」につられてしまったみたいだけれど……。
あれだけ迷いに迷って、途方にくれていたことだったのに、最後はこんなにも簡単に決まってしまった。お母さんが言った「詳しい人に聞くのが早い」というのは真実だったと、はからずもあたしは痛感したのだった。
そして今日が、夏期講習の初日だった。
講習は、何というか――勢いがすごかった。

講師の先生の強烈な勢いに、ひたすら圧倒されているうちに９０分の授業は終わった。つばが飛んできそうなほど熱い先生のしゃべりは、あたしのような考えの甘い生徒を強く叱責するものだった。このままじゃダメだ――真剣じゃない人は来なくていい――予習・復習は絶対条件――この夏は勝負の夏！

絶えず追い立てられているような気分で、必死にノートをとって授業を聞いて、あたしの頭はもうクタクタだ。こんな鬱鬱とした気持ちのまま帰りたくなくて、気分転換に塾周辺の探検に繰り出した、というわけ。

けれど、寒いくらい冷房がガンガンかけられた教室にいたあたしは、忘れていたのだ。夏のギラギラした日差しとこもる熱気が、いかに散歩に適さない環境か、ということを。

6

駅前は予備校の大きなビルが立ち並ぶけれど、少し歩けば、辺りは静かな住宅街となった。人かげはなく、セミだけが元気に声を響かせている。一番熱中症になる危険性が高い、昼過ぎの時間帯なのだ。誰も外に出ていなくて当然だろう。

少し先に見えたコンビニの看板に、あたしはふらふらと引き寄せられた。おなじみのそのマークが、まるでオアシスのように輝いて見える。ちょっと涼もう、あとできれば、何か飲み物を。

けれどコンビニの手前で、あたしは足を止めた。店の前にある駐輪スペースに、男の子がしゃがみこんでいる。

小学校低学年くらいの子だろうか。男の子は、自転車を必死にいじっていた。ガチャガチャと力任せに、鍵を差し込んで押したり引いたりしている。思いつめたような顔は真っ赤になっていて、汗がだらだらとつたっていた。

なんだか心配になって、あたしはその子に近寄った。

「何してるの？大丈夫？」

男の子はびくりと肩をすくませて、あたしを振り仰いだ。ぽかん、と口が開いている。

「もし困ってるんなら、お姉さん何か手伝おうか？」

男の子は鍵を握りしめて立ち上がった。途方にくれたように眉を下げ、自転車にちら、と目を向けた。

「……鍵、こわれちゃった。回らないんだ。」

「鍵ね、ちょっと貸して。」

あたしは男の子から鍵を受け取って、自転車に屈みこんだ。

「――ありゃ、これは……。」

思わず、口元が引きつる。鍵の差し込み口は随分錆ついていて、鍵自体もひどく折れ曲がっている。これは、回らないだろう。

「おれの自転車、お下がりなんだ。だから、古くて……。」

男の子は恥ずかしそうにうつむいた。自転車は籠がひしゃげて、褪せた水色の塗料も半分以上剥がれ落ちていた。年代物であるということは、一目でわかる。

「コツがいりそうだなぁ。ちょっとやってみるね。」

あたしは男の子に笑いかけて、気合いを入れるためにぐるんと肩を回した。邪魔な前髪を、コンコルドでぱちんと留めなおす。ひまわりのような、大きなイエローの花がついたクリップだ。夏らしい元気なデザインに一目ぼれして、つい最近買ったやつ。

あたしは鍵を、なんとか差し込んで回そうとした。

けれど、固い。中で何かにつかえているのか、鍵は奥まで入らない。力任せに押し込もうとしても、上下左右に角度を変えてみても、ダメだった。本当にこの自転車の鍵はこれなのか、疑いたくなるくらいだ。

しまいには、あたしの首すじもびっしょりと汗をかいていた。

「――お姉ちゃん、もういいよ。」

一緒にしゃがみこんでいた男の子は、諦めたように首を振った。あたしは手の甲で乱暴に汗を拭い、立ち上がった。

「いや、まだまだ。」

あたしはちょっとムキになっていた。手伝ってあげるつもりが大して役に立てず、このまま引き下がることはできなかった。こんな小さな子にがっかりされるのは、嫌だ。あたしにも、年長者の意地があるらしい。

「ペンチとか要るなぁ、これ。」

呟いて、よし、とひとり頷く。

「きみ、家どこ？」

「え？」

あたしの唐突な質問に、男の子は目を丸くした。けれど「お家はどこ？」と聞かれて素直に答える子なんて、今時の小学生にはいないだろう。男の子も、戸惑ってまごついた。

「な、なんで？」
「鍵開かないから、どのみちこの自転車は動かせないでしょ。これは置いて、一旦きみには家に帰って、道具を取って来てほしいの。」
「自転車おいて、家に戻るの？」
男の子は、ますます目を見開いた。そういう方法があると、初めて気付いたのだろう。今の今まで、自転車が動かなければ帰れないと、悲壮な顔をしていたのだから。
「あたし、ここで待ってるから。お家からペンチとか、工具箱みたいなの、取って来てくれない？」
本気になったあたしの言葉におされ、男の子は神妙な顔で頷いた。
「わかった。すぐに取ってくる。」
言うや、男の子はくるりと身を翻して駆けだした。その背中を見送って、あたしは曲げつかれた首を、一度大きく回した。そろそろ限界だった。
ひとまず、男の子が帰ってくるまで、コンビニで涼んでいよう。

コンビニで買ったペットボトルのお茶は、すぐに半分減ってしまった。汗で流れた分の水分は、これで補給できただろうか。生き返った気分で大きく息をはいた時、男の子が戻ってきた。
「お姉ちゃん、持ってきたよー！」
工具箱を掲げるようにして持ち、男の子は走り寄ってくる。あたしは大きく手を振った。
「うん、ありがとう！」
お疲れ様、と言おうとしたところで、あたしはぎくりと手を止めた。男の子の後ろに、男の人の姿が見えたのだ。
男の子ははぁはぁ息を弾ませ、汗をびっしょりかいている。けれど、もう不安そうな顔はしていなかった。絶大な信頼をこめた瞳で、後ろを振り返る。
「あのねぇ、兄ちゃん連れてきた！兄ちゃんが直してくれるって！」

あたしも、信じられないような思いで男の子のお兄さんを見つめた。
お兄さんは驚いたような表情で、ゆっくり歩いてやって来た。でもすぐに、間違えようのない近さまで来て、男の子に並ぶ。お兄さんは男の子の頭にポンと手を置いて、ふっと苦笑した。
「――うちの弟が、どうもお世話になりました。」
礼儀正しく頭を下げられて、あたしは慌てた。
「い、いえ！あたしは何もしてない……です。」
こちらもぺこりとお辞儀を返して、おそるおそる、目を上げた。
「ていうか……すごい偶然だね。」
お兄さんはぷっと吹き出した。眩しい笑顔。
「本当だよ、藤原さん。」
男の子のお兄さんは、小野くんだった。

7

目の前のテーブルには、気持ちよく冷えた麦茶のグラスが置かれている。ついさっきまで切望していたそれだけど、あたしは緊張のあまり、手に取ることができなかった。

予想外の展開に、未だに頭がついてこないのだ。

「遠慮せずにどうぞ。炎天下で、すごく暑かっただろ。」

小野くんは固まるあたしを気にもとめず、ごくごく自分のお茶を飲み干した。「あ、ありがとう」と、あたしはどうにかお礼の言葉を絞り出す。グラスに手を伸ばしたけれど、結局、ためらった末に膝に手を戻した。挙動不審になっているという自覚はあった。

あたしは、小野くんの家に来ていた。

自転車の修理は、あたしの出る幕などなかった。全て、小野くんが手際よく直してくれたのだ。鍵の歪みをペンチで戻して、差し込み口を2・3回蹴っ飛ばしただけで、すんなり鍵の引っかかりを解消してしまった。中学まで自分が乗っていたから、故障には慣れっこなのだと小野くんは笑った。

男の子は大喜びで、そのまま自転車に乗ってどこかへ行ってしまった。

「おーい、夕方までには帰ってこいよ。」

小野くんが男の子の背中に、大声で呼びかけた。それに「わかった！」と元気よく返事をして、自転車をこぐ姿はあっと言う間に見えなくなった。小学生のパワーは、本当にすごい。

「それにしても、慎士の言ってた『親切なお姉ちゃん』が、まさか藤原さんとは思わなかった。」

小野くんがこちらを振り返る。あたしはどきどきする胸を押さえて、頷いた。

「あたしも、あの子がまさか小野くんの弟さんだとは、思わなかったよ。」
「助けてくれたんだって？本当にありがとう。」
微笑んでまたお礼を言う小野くんに、あたしは首を振った。
「ううん、全然。」
本当に、何もしてない。結局小野くんが全部解決してしまったのだ。
急に、汗をかいている自分が気になって、首すじを手で拭う。においとか、大丈夫かな。今日している制汗スプレーは、石鹸の香りのはずだけれど。
「……あの子、慎士くんていうんだね。」
「そう。小野慎士だから、音だけはサッカー選手と一緒だよ。」
本当だ。顔を見合わせて、あたしたちは笑った。

――困ったなぁ。
小野くんから、目が離せなくて困る。どうしても、キラキラ眩しく見えてしまう。恥ずかしさをごまかしたくて、あたしはペットボトルに口をつけた。
一気にお茶を飲み干したあたしを見て、小野くんはしまった、という顔をした。
「ごめん、俺、気が利かなくて。――喉乾いてるよね？」
「え？」
小野くんはにっこり笑って、すっと後ろの方を指さした。
「俺ん家、すぐそこのマンションなんだ。お茶くらい出すから、休んでいってよ。」
「ええ？」
一気に心臓が跳ねた。あまりのことに、はいともいいえとも答えられないあたしに、小野くんがさらに続けた。
「慎士の自転車のお礼に。――まぁ、時間があれば、なんだけど。」
それで決まりだった。あたしは一も二もなく頷いた。そんなおい

しい誘いを、断れるはずがない。

小野くんの家はコンビニから5分ほど歩いた、白いマンションだった。中に入ると玄関も続く廊下も整然と片づいていて、落ち着いた色合いのマットや小物が置かれている。あたしは学校の、きれいに片づいた小野くんの机を思い出した。学校での小野くんと、普段の小野くんとのつながりを垣間見たようで、ちょっと嬉しくなる。

案内されたリビングも、出されたグラスも洗練されて見えた。あたしの家と全然違う！と思ってしまうのは、贔屓目のせいだろうか。気をつけていないと、失礼なくらいきょろきょろ眺めてしまいそうだ。

意識して、あたしは視点をしぼった。周りを見ないようにすると、自然、小野くんの顔ばかり見てしまう。あんまりじっと見つめてしまったからか、小野くんが不思議そうな表情になった。あたしは慌てて、話題を探す。

「ええと、小野くんと弟さんって、あんまり似てないね。」

小野くんは苦笑した。

「よく言われるよ。俺が母さん似で、慎士は父さんの方に似てるから。」

弟の慎士くんのことを話す小野くんは、とても穏やかな目をしていた。弟くんのことが、かわいいのだろう。結構年が離れた兄弟だけど、仲が良いんだろうな。

「うらやましいなぁ、かわいい弟がいて。あたしの弟なんか、全然かわいくないよ。」

「へぇ、藤原さんも弟がいるんだね。」

小野くんがぱっと顔を明るくして、身を乗り出した。けれど反対に、あたしの表情は渋くなる。

「うん。翔っていうんだけど、生意気でムカつくだけだよ。中学3年生だから、あたしより背は大きいし、反抗期だし。ケンカばっか

り。」
「そうなんだ。年が近いと、そんなものなのかな。」
小野くんはおもしろそうに首をかしげた。
この話題がウケるようなので、あたしはしばらく翔との普段のやりとりやケンカの数々を、おもしろおかしく話した。ちょっと大げさにしたところはあるけれど、大体は真実だ。小野くんは唖然としたり、ぷっと吹き出したりして、あたしのおしゃべりにつき合ってくれた。なんだか和やかで、なかなかいい雰囲気だ。
弟の話題が尽きて、ふっと場が静かになる。けれど、楽しい、浮かれた気分はそのままだった。あたしはにやにや笑ってしまいそうになるのを抑えて、お茶を一口飲んだ。小野くん家の麦茶は、あたしの家のより香ばしい風味がする。
「――藤原さん、今日は塾だったの？」
椅子の下に置かれたあたしのカバンを見て、小野くんが聞いた。
「うん。今日から早速、夏期講習で。」
ほら、とあたしはカバンを開けて、講習のテキストを取り出した。今日受けたのは、数？の授業だ。今までの復習が中心だけど、受験対策も一緒に含まれているから、応用問題は難しかった。
小野くんはへぇ、と興味深そうにテキストを手にとって、ぱらぱらとめくった。問題を見る目つきも少し、真剣なものになる。
「小野くんは、夏期講習には行かないの？」
「うん、お金がかかるから。」
ありがとう、と言って小野くんはテキストをこちらに返した。
「……俺は、受験勉強はなるべく、独力でやろうと思ってるんだ。」
びっくりして、あたしはまじまじと小野くんを見返した。浮ついた気分も引っ込んだ。
「自分で勉強するってこと？」
「うん。塾も家庭教師も、高いから。」
小野くんは、ちょっと困ったように笑った。

「俺んち、そんなに金ないし。今までも一人で勉強してきたから、できると思って。」

すごい。あたしは圧倒されて、声も出なかった。

足場を突き崩されるような衝撃だった。なんてすごいんだろう。小野くんはもう進路について、ちゃんと考えて決断を下しているんだ。お金のことも自分の学力のことも、考慮に入れた上で決めたんだろう。なんとなく、ただ流されるようにして講習に通い始めたあたしとは、大違いだ。

目の前に座る小野くんが、ひどく大人に見えた。同級生、同い年のはずなのに、考え方がこんなにも違う。

――進路、なんて。まだあたしには曖昧で、遠く感じるものなのに。

8

「……小野くんは、大学で古典を勉強するの？」
もう一歩踏み込んで、あたしは尋ねた。小野くんの話を、進路についてのことを、もっと聞いてみたくなったのだ。「詳しい人に聞くのが早い」ではないけれど、小野くんがどう考えているのかを、知りたいと思った。
「いや、大学ではやらない。」
小野くんは首を振った。
「古典は好きだけど、大学の志望学部は、国文学じゃないから。……俺の古典好きは、趣味みたいなモンだよ。大学で専門に研究するのとは、ちょっと違うかな。」
それもおもしろそうだけどねー、と小野くんは深く息をはいて、椅子にもたれた。
なんだか、意外だった。あたしの中では、小野くんと古典は分かちがたく結びついているけれど、当の本人にとってはそうではないのだ。好きなものでも、その道に進むかどうかは、また別の問題なのだ。
「――小野くんが古文の先生になったら、あたしみたいに古文好きになる子が増えると思うのになぁ。それには、ならないの？」
ついぽろりと、本心からの言葉がもれた。小野くんは「……そうかな」と、口の端だけで微笑む。考え込むように頬杖をついて、目を伏せた。
その笑みを見て、はっと気付いた。――踏み込みすぎだ。
小野くんを、困らせてしまった。小野くんの進路のことについて、あたしがいろいろ言う権利などないのに。
「ごめん……。」
うつむくあたしに、小野くんはちょっと慌てたようだった。
「えっ、なんで謝るの！？今、謝るところなんて何もなかったよね

？」
謝らないでと両手を振ってから、小野くんはちょっとはにかんだ。
「むしろ、俺がお礼を言いたいよ。――藤原さん、本当に古典を好きになってくれたんだな。」
あたしは微笑んだ。
小野くんの言うとおり、あたしは苦手だった古典を好きになった。それは小野くんのおかげだ。――けれど、古典だけを好きになったのではないのだ。
「藤原さんが古典好きになる手伝いができて、俺も嬉しいし、楽しいよ。……古典仲間ができたみたいで。」
「古典仲間？」
小野くんは照れたように視線をそらした。頭をかいて、うん、と頷く。
「そう。変な言い方だけど、古典好きの仲間。一緒に古文を勉強できる仲間なんて、かなり貴重だよ。」
こんな改まると、なんだか恥ずかしいな。小野くんは肩をすくめて、誤魔化すように苦笑した。
あたしも、曖昧に笑みを返す。けれど、かわいく笑えている自信はなかった。もしかしたら、頬が引きつっているかもしれない。
あたしを「貴重」と言ってくれた小野くんの言葉は、嬉しい。けれど正直、複雑な気分だった。
「……古典仲間、かぁ。」
――それは友達、ということなのだろうか。
古典の勉強を通して、あたしと小野くんは確かに仲良くなった。よく話すようになったし、こうして、家にも入れてもらえるくらいに。
……でも本当に、近くなっているのかな？
例えばあたしにとっては、こうして小野くんの家にお邪魔するなんて、夢のようなことだ。足元が覚束ないような、胸がきゅっと絞

られるようなことだ。
けれどたぶん、小野くんにとっては違う。小野くんは、あたしが疲れているだろうと思って、休ませてくれただけ。きっとふわふわした気分にもなっていないし、ドキドキ緊張してもいないだろう。たぶん、吸い寄せられるように見つめてしまうことも、笑顔を眩しく思うことも、ないんだ。
――これが、友情と恋の、違いなんだろう。胸が痛くなるけれど、そうなんだ。

「……ね、古典には、友情の歌ってあるのかな。」
ふと思いついて、あたしは尋ねた。小野くんが首をかしげる。
「え、友情の歌？」
「うん。なんとなく今、気になって。」
これまで勉強した和歌は、みんな恋の歌だったような気がする。昔の人は友情より恋愛だったのかなと、ふと思ったのだった。
小野くんは腕組みをして、難しい顔で考えこんだ。うーんと唸って、頭をひねっている。あたしは慌てて手を振った。
「いや、ごめん。ただの思いつきだから。」
意外に厄介な質問をしてしまったらしい。本当に、ただ思ったことをぽろっと口にしただけなのだ。小野くんを煩わせたかったわけじゃない。
けれど小野くんは、何か思いついたようだった。テーブルの隅に置かれたメモ帳とペンを引き寄せて、さらさらと書く。
「友情の歌って、言われてみればあまりないのかもしれないなぁ。俺、今これしか思い浮かばなかった。」
小野くんがメモを破いて、差し出した。それを受け取って、あたしは書かれた端正な文字を読み上げた。
めぐり逢ひて　見しやそれとも　わかぬまに　雲がくれにし　夜半の月影（紫式部　新古今　１４９９）

「藤原さんも、聞いたことあるんじゃないか？それ、百人一首にも入っているから。」
小野くんが身を乗り出す。けれど残念ながら、あたしは百人一首なんて一つも覚えていない。確か、小学校の時に暗記テストをしたはずだけれど、きれいさっぱりと忘れてしまった。百人一首なんて、今じゃお正月にも触らなくなったな。
情けない顔をしたあたしに気付いて、小野くんはすぐに解説を入れてくれた。
「それは、紫式部が詠んだ歌なんだ。幼友達に久しぶりに会ったけど、すぐ別れちゃって、それが残念で寂しい、っていう意味だったと思う。」
「へぇ、紫式部の……。」
その有名な名前なら、さすがにあたしでも知っている。
源氏物語の作者。古文では、必ず覚えなければならない重要人物の一人だ。教科書に、いつも太字で書かれている女性。
「他には大伴家持が、友に向けた歌を詠んでたと思うけど……ちゃんと思い出せないな。今度、調べとくよ。」
小野くんの真面目な声に、あたしは生返事しか返せなかった。メモに釘付けだったのだ。
千年も昔の紫式部は、友達にこれを詠んだのだろうか。友達に久しぶりに会って、でもすぐに離れなきゃいけなくなったとしたら、今ならメールを送るけれど。「次いつ遊ぶ？＾―＾」なんてやりとりは、平安時代には絶対にないんだろうな。
――めぐり逢ひて、か。
「……これ、友情の歌なんだ。」
メモから顔を上げて、あたしはその言い回しをしみじみ噛みしめた。
「めぐり逢う」だなんて、「別れが寂しい」だなんて、……困ってしまう。――友情の歌なのに、あたしには恋の歌に聞こえてしま

うから。

たぶん、それは小野くんのせいだ。

「紫式部っていえば、源氏物語だね。藤原さん、古典好きになったなら、一度読んでみるといいよ。現代語訳がたくさん出てるし、マンガもあるから。」

源氏の現代語訳をあれこれと指折り挙げる小野くんは、生き生きしていた。楽しそうに、目を輝かせている。

ああ、小野くんは本当に古典が好きなんだ。

あたしはその笑顔がいとしいような、ちぇっと拗ねてしまいたいような、不思議な気分だった。そんな自分がおかしくて、口元がふとゆるむ。

――小野くん。あたしは古典が好きだけど、それよりも小野くんが好きだよ。

飛び出しそうになる言葉を押さえつけるために、あたしはまた麦茶を飲んだ。喉を滑り落ちて、口の中には苦みが残った。

好きだって、言ってしまいたい。

でも、今はダメだ。

どちらも正直な気持ちで、あたしは迂闊に口を開けなかった。告白したいけれど、今はできない。だって、あたしには何も自信がない。飛び込んでしまう勇気も、なかった。

「……あたし、期末の古文は、平均点あったんだ。」

告白の代わりに、あたしはぽつりと呟いた。小野くんが、ぱっと笑顔になる。

「本当？じゃ、中間テストの倍になったんだ！やったじゃんか、藤原さん。」

あたしは微笑む。いたずらを思いついたような気持ちで、おどけて言った。

「ね、次は８０点とれるかな？」

「とれるよ。藤原さんの成長ぶりは、本当にすごいな。」
小野くんはあっさり頷いて、しきりに感心している様子だった。
すごいを連発して、自分のことのように喜んでくれた。
……でもそんなに簡単に、「とれるよ」なんて言っていいのかな？
「――あたしが８０点とったら、小野くん、」
たぶん、自信も勇気も出ると思うから。だから。

言いかけて、やめた。きょとんとしている小野くんに、「なんでもない」と、誤魔化して笑う。
ここから先は、８０点をとった後だ。その時に、言おう。
「決めた。あたし、２学期は絶対古文で８０点とる。がんばる。」
新たな目標ができた。古典の勉強、もっとがんばらないと。下級役人のままでは、ダメなんだ。
がんばってがんばって、――小野くんに好きですって言うんだ。
テーブルの下で、あたしは拳を握りしめた。
「応援してね、小野くん。」
「うん、もちろん。」
あたしの決意など何も知らない小野くんは、笑って頷いた。

9

待ち人は、まだ来ない。あたしは足元の石ころを意味もなく蹴っ飛ばした。夕日にじりじりあぶられてほてる腕を、ゆっくりさすって宥める。

いい加減、カバンをかけている肩が痛くなってきた。荷物くらい、家に置いてから来ればよかった。けれど頼子からのメールによると、もうすぐ帰ってくるのだ。入れ違いになってしまうのは避けたい。

『球場は撤収完了。部員はミーティングしてから4時ごろ解散だって。』

携帯を開いて、頼子からのメールを見返した。

いつもより文字数も絵文字も少なくてそっけないのは、まだ怒っているからだろう。あれだけ謝ったのだけれど。後でもう一度、電話してみよう。

「――藤原？」

驚いた声がして、あたしはぱちんと携帯を閉じた。顔を上げると、野球部のジャージ姿の新田くんが立っていた。

ああ、やっと帰って来た。あたしはほっとして、微笑んだ。

新田くんの顔は、頬も鼻先も真っ赤に焼けていた。炎天下での全力プレーだ、日焼けも帽子についた土のあとも当然だろう。エナメルのどっしりしたバックも、少しくすんで鈍く光りを弾いていた。

あたしは、第一にいおうと決めていた言葉と共に、スポーツドリンクを差し出した。

「初戦突破、おめでとう。これ、ささやかながらお祝いです。」

さっき買ったばかりのスポーツドリンクは、まだ十分に冷えているはずだ。少し揺らしただけで、水滴がぱたぱたと落ちる。

けれど、新田くんは動かなかった。呆然としたような顔で、立ちすくんでいる。

どうしたんだろう？不思議に思って、あたしは自分から近づいた。弾かれたように、新田くんが一歩下がった。
「――ちょっと待った。」
掌を向けて、新田くんは強い口調で言った。
「お前、それ以上近づくな。」
「ええ！？」
ショックだ。あたし、何かしただろうか。
ガーンと打ちのめされるような衝撃に動けないでいると、新田くんが焦ったように手を振った。
「いや、においがすごいから。近寄んな。」
「におい？」
思わず、自分の腕に顔を寄せて嗅ぐ。新田くんは渋い表情で「そうじゃない」と言った。
「……俺だよ。試合後だから、すげえ汗くさい。」
あまりに真剣な口調だったので、ついついあたしは吹き出した。汗くさい、だって。
「それって、当たり前だよね。新田くん、野球してきたんだから。」
「そうだけど。」
新田くんの表情がますます苦くなる。
「あの梶の彼女が、試合の後うるさかったから。『何このにおい！？近寄らないで！』とか、散々言われた。」
頼子……。あたしは眩暈を覚えてふらついた。顔をしかめた頼子のとがった声が、聞こえてくるようだ。想像できてしまうところが恐ろしかった。
「……あの子、決して悪気があるわけじゃないんだ。」
ただ、デリカシーがないだけで。苦しいあたしのフォローに、新田くんは頷いた。
「結構キツイ性格の女なんだってな。くさいって言われて、梶は死んでたけど。」
でも、そこが好きなんだそうだ。新田くんは少し肩をすくめて、

にやっと笑った。
新田くんには珍しい、からかうような笑みだ。瞳がおもしろがるように、キラキラ輝いている。
勝利の喜びが、大きな体から溢れているようだった。いつも仏頂面の新田くんだからこそ、抑えきれない喜びの大きさがわかる。あたしもつられてにっと笑って、大きく一歩踏み出して新田くんに近寄った。
「本当だ、頑張ったってよくわかるにおいだね。」
「うるさい。」
スポーツドリンクは、無事に新田くんの手に渡った。

ごくごくと上下する喉を見ているうちに、あたしは今更ながら、とても残念な気持ちに駆られた。今日の試合、見に行きたかった。頼子からちょくちょく送られてくるメールからも、白熱した試合なのだということがわかって、やきもきしていたのだ。
「……今日はごめんね、見に行けなくて。」
ぽつりと謝ると、新田くんはすぐにペットボトルから口を離して、首を振った。
「いや、塾だったんだろ？いいって。」

夏期講習が重なって、あたしは結局野球部の応援に行けなかった。
断るのが遅くなってしまったせいで、頼子には散々文句を言われた。曖昧に約束してしまったのは、あたしが悪い。平謝りして、直前に千羽鶴もできる限り手伝ったけれど、頼子はまだむくれているみたいだ。それだけあたしと応援に行くことを楽しみにしてくれていたんだと思うと、悪いことをしたなと申し訳なくなる。
応援より講習をとったのは、あたしだ。見に行かないと、あたしが考えて決めたことなのに、こうやって結局後悔するなんて。
どっちつかずの自分に、ため息が出てくる。
「……夏休みなんだから、やりたいことが全部やれたらいいのに。」

思わずもれた愚痴に、新田くんはふと口元をゆるめた。
「やりたいことが、たくさんあるんだな。」
「……うん、まぁね。」
最近「やりたいこと」の筆頭に挙がったことを思い出して、あたしは微笑んだ。想うだけで、やわらかい気持ちになる。
小野くんのことを考えるだけで、他のことも頑張ろうと思えるから不思議だ。やりたいことなんか、目一杯ある。まだ夏休みは、始まったばかりなのだから。

10

「次の試合、来週の水曜日なんだよね？その日は応援行けるよ。絶対行く。」
胸の前で拳を握って、あたしは力を込めて宣言した。新田くんは淡々と、「ああ」と頷いた。
「そういえば、新田くんのポジションってどこだっけ？」
「ライト。打順は7番。――朝子って、野球のルール知ってるのか？」
本気で疑わしそうに新田くんが首を傾けるので、あたしは胸を張った。
「失礼な、ちゃんとわかってるよ！ばんばんホームラン打って、勝ってね、新田くん。」
「……わかった、あんまり野球見たことないんだな。」
新田くんは苦笑した。えへへと、あたしは首をすくめる。
新田くんの言うとおり、あたしはテレビでもあまり野球は見ない。どうしてバレたんだろう。やっぱり詳しい人にはそういうこと、わかるのだろうか。
「でも、ホームラン打ってよ、ゆーくん。予告ホームラン！みたいなさ。」
調子に乗ってあたしが腕を振ると、新田くんは顔をしかめた。面倒臭そうに、「ハイハイ」と投げやりな相づちを打つ。これだから素人は、と呆れているのだろうか。
ちぇー、とあたしは唇をとがらせて、笑った。
予告ホームランは相手にされなかったけれど、何にせよ、新田くんには頑張ってほしい。あたしも、全力で応援しようと決めた。
「……なんでそんなに、ホームラン打ってほしいわけ。」
新田くんが、首をかしげて尋ねた。どうして、と言われても。あ

たしが野球と聞いて真っ先に思い浮かぶのが、ホームランなのだ。
「だって、野球と言えばホームランなんじゃないの？それが１番なんでしょう？」
「それだけが野球じゃねぇと思うけど。」
新田くんはふーんと、関心が薄そうに呟いた。顎に手を当てて、少し考え込むような顔をする。
「……じゃあ、条件がある。」
「条件？」
新田くんは頷いて、校章の入った帽子を被り直した。鍔の角度が変わって、目が隠れる。
「次の試合、ホームラン狙う。だから、俺が打ったら朝子に聞いてほしいことがある。」
「え――。」
なぜだか、鼓動が跳ねた。新田くんの出した条件に、覚えがあるような気がした。

「もし俺が、ホームラン打ったら――」
新田くんの言いかけた言葉に、あたしは息をのんだ。
とっさに笑うことも、何？と問いかけることもできない。眩暈のような既視感が襲う。
――つい最近、あたしもこんなことを言わなかった？

「……やっぱ、やめた。」
たっぷり間をとってから、新田くんはふーっと大きく息をはいた。
「試合でこういう賭けみたいなことするの、好きじゃない。……ごめん、調子に乗った。」
なんでもないから。新田くんはゆっくり首を振って、ちょっと笑った。
「うん……。」
なんでもないなら、いいのだけれど。

一度上がってしまった心拍数は、すぐには戻らない。胸のあたりをぎゅっと握って、あたしは心の中で落ち着け、と繰り返した。
新田くんが、この前のあたしと同じことを言おうとしたはずがない。あたしと新田くんが同じようなことを考えたなんて、そんなはずは。
「じゃ、もう行くから。これ、ありがとな。」
新田くんが、半分近く減ったペットボトルを持ち上げて、軽く振った。「うん」とあたしは頷いて、目を伏せる。なんだか、新田くんの顔をまともに見ることができなかった。
――ゆーくん、何て言おうとしたの？
飲み込まれた言葉は、何だったのだろう。わからない。聞く機会は既に、失われてしまった。
「次の試合、絶対来いよ。」
真剣な顔で、新田くんは念を押した。じっと見つめられて、あたしは気圧される。
「う、うん、行くよ。頑張ってね。」
それは約束できる。あたしが請け合うと、新田くんはふっと笑った。
そのまま、あたしたちは別れた。

――その後どうやって家に帰って来たか、覚えていない。ぼんやりして、何度か何もないところでつまづいた。頭の中はゆーくんのことで一杯だった。
もし俺がホームラン打ったら、と言いかけた彼の言葉が耳によみがえる。
その続きは、何だったのだろう。もしその続きを聞いていたら、どうだったのだろう。全くわからないけれど、あたしの胸は暗雲のような予感でいっぱいだった。――聞いてしまったら戻れない、というような。

この不安は、どこから来るのだろうか。
自分の部屋に戻ったあたしは、カバンを机の上に放りだした。ベッドの上に座って、膝を抱える。電気をつけない部屋の中は、夕闇で薄暗かった。
言いかけて止めたのは、ついこの前のあたしも同じなのに。それでも新田くんを、ずるい、と責めたくなるのはなぜだろう。こんなふうに混乱させるなら、全部言うか、あるいは何も言わないでほしかった。
でも、続きを聞きたかったのか、聞きたくなかったのか。本当はどちらを望んでいたのか、あたし自身にも全然わからないのが、一番の問題だ。

……たぶん、あたしの考えすぎだ。自意識過剰。きっとそう。
ゆーくんは大切な幼馴染で、仲の良い友達で。小さい頃、一緒にごっこ遊びをしたような仲だ。あたしは彼に、飛び蹴りまでして……。
額に手を当てて、ぐるぐる混乱する自分に言い聞かせる。

けれど、なぜか昔のゆーくんをしっかり思い出せない自分に、あたしは気付いたのだった。

11

サンダル履きの足が痛くなるくらい歩き回った本日の成果は、上々だ。頼子は黒いキャミソールにデニムのスカートと、ウサギがプリントされたTシャツ。あたしも水色のTシャツと、欲しかった2wayのワンピースを手に入れた。

あたしと頼子の服の趣味は結構似ているから、一緒に買い物していても全く退屈しない。おかげで、2人であれこれ言いながらお店を巡り歩いて、足が棒のようになってしまった。袋を提げた腕も痛い。

「疲れたー。もう、どこも混みすぎ。」

うんざりした口調で、頼子がぼやく。あたしも同感だった。

やっと空いた席に座れたファーストフード店で、あたしと頼子は休憩中だ。涼しい店内は人でごった返していて、2階席も埋まっていた。夏休みの人出は、恐ろしい。

今日の買い物は、あたしが野球部の応援を直前で断ったことの埋め合わせだった。

……一応はそういう口実なのだけれど、もうあまり関係ないのかもしれない。頼子は今日その話題を出して拗ねたりしないし、ただ遊びに来ただけという感じだ。だからあたしも、気楽に買い物を楽しめた。

アイスティーを飲んで一息ついたあたしは、やれやれとハンドタオルで顔を拭った。凝った肩をほぐすために、首を回す。鮮やかなメロンソーダをすすった頼子が、「そういうの、オヤジくさいよ」と指摘してきた。

「うるさいなー。だって暑いし、疲れたんだもん。」

唇をとがらせると、頼子は呆れた顔をした。

「そんなこと言って、オヤジ化女子は嫌われるぞ？朝子、恋愛して

るのにそんなんでいいの？」
「えっ。」
思わず、大きく肩が跳ねた。頼子がにやりと、会心の笑みを浮かべる。
しまった、とあたしの顔は引き攣った。誤魔化すのも、もう遅い。こんな時、ポーカーフェイスになりたいと、切実に思う。
「はい、じゃあ今から朝子サンの恋バナタイムといきますか！」
「いきません！なんで急に、そんな話。」
ノリノリで手を叩いた頼子を、慌てて遮った。けれど、頼子は追及の手をゆるめなかった。
「なんで、って。だって朝子、何かあったんでしょう？」
見てればわかるよ、と頼子は不敵に微笑んだ。ぐうの音も出ず、あたしは黙りこむしかない。
どうして、頼子にはわかってしまうのだろう。あたしにはない、特別なセンサーでもあるのだろうか。この強敵には、隠し事など一切できないのではないかと思えてしまう。
「ぼんやりしてるし、かと思えばそわそわしてるし。
――それに、今日一度も学校の話題が出ていない。」
すっと伸びた人差し指があたしに向けられる。頼子の洞察力に、あたしは舌を巻く思いだった。顔がかぁっとほてるのがわかる。言い当てられすぎて、なんだか悔しい。
「さぁ、誰と何があったのか、いい加減に吐きなさい。」
にやにや笑いながらも強い光をもった頼子の目に、思わずたじろいだ。
とっさにぱっと思い浮かんだのは、新田くんの顔だ。ついこの間の、日焼けした彼の顔。
慌てて、あたしはその記憶を追いやった。あのことは、あたしの中で保留にしてあることなのだ。きっと気のせい、あまり考えないようにしよう。それが、あたしの考えた精一杯の結論だった。

「……別に、大したことは何もないけど……。」
仕方なく、あたしは塾の帰りに偶然小野くんと会ったことを話した。小野くんの弟を助けたこと、家に行ったこと。進路の話とか、いろいろ話したこと。
そして、心に決めた目標のことも。
「――８０点！？本気なの、朝子。」
古文で８０点とれたら、小野くんに告白する。
それを聞いて、頼子は目を丸くした。ぐいと身を乗り出してくる。
「本当に、あの地味な奴が好きだったんだ。」
「またそういうこと言う。だから、小野くんは別に地味じゃないって。」
あたしにとっては、憧れの上達部なのだ。
頼子は、大きく息をはいた。固い椅子に、沈み込むように寄りかかる。
「小野ねぇ……わかんないなぁ。８０点とれたら告白なんて、そういう条件をどうしてつけるのかも、よくわからないわ。」
好きなら好きと、早く言えばいいのに。頼子は簡単にそう言った。痛いところを突かれて、あたしの反論は小さくなった。
「そりゃあ、頼子はそうできるんだろうけど……。あたしには、いろいろ心の準備がいるの。」
まぁいいけど、と頼子はため息をついた。
「わざわざ、そんな難しい条件にしなくてもいいのに。古文で８０点なんて、告白できるのはいつになるかしらねぇ。」
「――すぐだよ、絶対。８０点っていうのは、もうすぐ、ってことなんだから。」
ムキになって、あたしは言い返した。これは実現できる目標だと、信じている。
あたしは自信が欲しいのだ。小野くんにふさわしくなりたい。古典を教わる生徒ではなくて、対等な、並び立つ存在になりたい。小野くんの上達部に見劣りしないような。

――そして、あたしを選んでもらいたい。
古文の８０点は、そのための目標なのだ。

「まぁ、朝子もついに恋する女の子の仲間入りってわけね。」
頼子がストローをくわえて、伸びをするように上を向いた。
「わたしは、朝子は新田といい雰囲気なんだと思ってたけど。」
ふいに頼子が出した名前に、息が詰まった。なんとか動揺を抑え込んで、あたしは答える。
「……新田くんは、幼馴染だよ。」
ふうん、と頼子はくわえたストローを揺らした。
「――よし、じゃあ乾杯しよう。」
頼子は切り替えるように言って、ジュースのカップを持ち上げた。唐突な提案に、あたしは思わず苦笑した。
「乾杯って、何によ。」
「いろいろあるでしょう、乾杯することは。」
頼子は指を折って数え始める。
「朝子の成長に。地味で古典の得意な小野くんに。８０点の大きな目標に。『もうすぐ』にせまった告白に。
……ああ、まとめよう。」
頼子は厳かに、紙のカップを掲げた。
「――朝子の、古典の恋に。」

１００円のアイスティーとメロンソーダで、あたしたちは乾杯した。
滑稽だけれど、２人とも大真面目だった。たぶんそれは、あたしも頼子も同じだからだろう。
あたしたちは、恋をしているのだ。

11（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

その四は今のところ、未定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4552m/

古典の恋　その三

2010年10月8日13時47分発行